ぬれつゝぞ玄ゐて折つるとしの内に春はいくかもあらじと思へば

昔左兵衛督なりける在原行平といふありけり、その人の家によきさけ有と聞て、うへに有ける左中辨ふぢはらのまさちかといふをなん、まらうどざねにて、その日はあるじまうけ玄たりける、なさけある人にて、かめに花をさせり、其花の中にあやしき藤の花ありけり、花の玄なひ三尺六寸計なん有ける、それを題にてよむ、よみはてがたに、あるじのはらからなるあるじ玄給ふと聞てきたりければ、とらへてよませける、もとより歌のことは玄らざりければ、すまひけれど、玄ゐて讀せければかくなん、

咲花の玄たにかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも、などかくしもよむといひければ、おほきおとゞの、榮花のさがりにみまそかりて、藤氏のことにさかゆるを思ひて、よめるとなんいひける、皆人そしらずなりにけり、

〔古今和歌集春〕玄がよりかへりけるをうなどもの、花山にいりて藤の花のもとにたちよりてかへりけるに、よみておくりける、　僧正遍昭

よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも

家に藤の花さけりけるを、人のたちとまりてみけるをよめる、　みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすぎがてにのみ人のみるらん

〔大和物語上〕亭子院に、みやすむどころだち、あまたみそうじしてすみ給ふ事年比ありて、河原院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極のみやすむどころ（○宇多后藤原褒子）ひと所のみそうしをのみ玄てわたらせ給にけり、春のこと成けり、とまり給へるみさうしども、いとおもひのほかにさうゞしき事をおもほしけり、殿上人などかよひまいりて、藤の花のいとおもしろきを、これかれさかりをだに御らんせでなどいひて見ありくに、ふみなん結びつけたりける、あけてみれ